

玉の輿こしの呪

野村胡堂

一

「あッ、ヒ、人殺しッ」

宵闇を劈つんぎく若い女の声は、雑司ぞうしガ谷やの静まり返った空気を、一瞬しゆん、煮えこぼれるほど搔かき立てました。

「それッ」

鬼子母神きしほじんの境内から、百姓地まで溢れた、茶店と、田楽屋でんがくやと、駄菓子屋と、お土産屋は、一遍に叩き割られたように戸が開いて、

声をしるべに、人礫ひとつぶてが八方に飛びます。

「お吉じゃないか」

誰かが、路地の口に、ガタガタ顫えている娘の姿を見つけました。

「お菊さんが、お菊さんが——」

お吉の指さす方、ドブ板の上には、向う側の家の戸口から射す灯あかりを浴びて、紅あけに染んだ、もう一人の娘が倒れているではありませんか。

「あッ、お菊」

人垣は物の崩くずれるように、ゾロゾロと倒れているお菊の方に移

りましたが、蘇芳すおうを浴びた虫のように蠢うごめく断末魔だんまつまの娘をどうしようもありません。

「お菊、どうしたんだ」

弥次馬を掻き分けて飛込んで来たのは、落合の徳松というノラクラ者、いきなり血潮の中から、お菊を抱き上げます。

が、お菊はもう虫の息でした。半面紅あけに染んだ顔は、恐ろしい苦痛に引吊って、カツと見開いた眼には次第に死の影が拡ひろがるのです。

「お菊ッ、——だから言わない事じゃない、罰ばちが当たったんだ」

徳松は死に行くお菊の顔を憎悪とも、懐かしさとも、言いよう

のない複雑な眼で見据えましたが、やがて自分の腕の中に、がっくりこと切れる娘の最期を見届けると、

「お菊ッ」

激情に押し流されたように、自分の濡れた頬を、娘の蒼ざめた頬にすりつけるのです。

「あッ、何とということをするんだえ、畜生ッ」

転げるように飛込んで来たのは、五十年配の女——お菊の母親のお楽でした。いきなり徳松を突き飛ばすと、その膝の上から、娘のお菊を搥むしり取ります。

「おっ母かア、お菊は大変だぜ」

わずかに反抗する徳松。

「お前がやったんだろう。畜生ッ、どうするか見やがれ」

戦闘的な母親は、お菊が死んだとは気がつかなかったものか、相手の男を憎む心で一パイです。

「違うよ、俺じゃねえ」

「あッ、お菊、確かりしておくれ、おっ母アだよ、お菊ッ」

「お菊、お菊ッ、死んじゃいけないよ。お菊、明日という日を、あんなに楽しみにしていたじゃないか」

「お菊」

母親のお楽は、自分の腕の中に、一と塊かたまりの襦袢ほろき切れのように崩折れるお菊を揺ぶりながら、全身に血潮を浴びて、半狂乱に叫び立てるのでした。

「おつ母ア、驚くのは無理もねえが、——お菊坊がこんなになつたのは、おつ母アのせいもあるんだぜ」

あかりさき

徳松はまだそこに居たのです。灯先にヌツと出した顔は——

身体は——、顎あごから襟へ腕へ——膝へかけて、飛び散る碧血へきけつを浴

びて、白地の浴衣を着ているだけに、その凄まじさというものはありません。

「まだウロウロしているのかい、——お菊を殺したのはお前だろ
う」

もうぜん
猛然と振り仰ぐお楽。

「違うよ、俺じゃねえ、大名なんかへやる気になつたから、魔が
さしたんだよ」

「何を、——お菊はな、お前のような肥桶臭い小博奕打の相手に
なる娘こじゃない。弾ね飛ばされたのが口惜しくて、こんな虐むじたら
しい事をしやがったろう」

「違うよ、おつ母ア」

「覚えていやがれ、そのガン首をお処刑台しおきだいの上に晒さらしてやるから」

そう言ううちにもお楽は、お菊の死骸をかき上げかき上げ、赤ん坊でもあやすように、血潮に濡れた肩から、頸筋へ、額にかか
る黒髪のあたりへと、際限もない愛撫あいぶを続けるのでした。

二

話は十日ほど前に遡さかのほります。

雑司ヶ谷の鬼子母神門外、大榎の並木の蔭ならに竝ならんだ茶店は、そのころ江戸の町内にもない繁昌をみせたものでした。

一つは大奥始め、諸家の女中、町人の女房たちの信仰を集めた

鬼子母神の御利益と、もう一つは、鷹野たかのの、野駆のがけ、遠乗りに頃合なので、代々の將軍始め、大名、旗本、諸家の留守居、若侍たちに、一番人氣のあつた遊び場所でもあつたのです。

かずさのくに

上総国勝浦一万一千石の領主、植村土佐守は、若くて寛達で、獵と女と遠乗りが何より好きという殿様でした。家来のうちでも、世故せこに長たけた柴田文内と、若くて腕のできる吉住求馬もとめは、お氣に入りの筆頭で、その日も土佐守の遠乗りのお供をして、呉服橋の上屋敷から、一氣に目白へのし、歸りは鬼子母神のお樂の茶店へ寄つて、持参わりごの割籠わりごを開いてきたのです。

大名は滅多よそに他所よそで煮炊にたきした物を食べません。茶店から貰つ

たのは、熱い湯と、生みたての鶏卵たまごだけ。

「お楽、——今日は御微行おしのびだから、何も御修業だと仰しやる。地酒を一献こん差上げてはどうじゃ」

柴田文内は、顔見知りのお楽へ、こんな事をねだりました。

「へエ——」

お楽は恐る恐る樽たるの呑口を捻ひねって、地酒といつても自慢のを一本、銅壺どうこへ投り込んで、さつそくの爛かんをすると、盆ちやくへ猪口を添えて、白痴こけがお神楽かぐらの真似をする恰好で持って出ます。

「気がきかないお楽だな。お前のところには、お浅あさとかいう娘があつた筈ではないか。酌しゃくも大事なおもてなしだ、平常ふだん着のまま

構わぬ、出せ出せ」

柴田文内は、主君土佐守のニコニコする顔を見ながら、身分柄にも似ぬぞんざいな口をききます。

尤も、もつと植村土佐守はこんな事が好きで好きでたまらなかつたのです。

「浅はこの春亡なくなりましたよ、旦那様」
お楽は恐る恐る坐り込みました。

「ホウ、それは愁傷しゆうしやうであつたな。——が、此店ここへ入つたとき、綺麗な娘が居たように思うが——あれは誰だ」

「浅の妹の菊でございます」

「その菊で宜い、ここへ呼んでくれ。酌を申付ける。姉の浅よりも一段のきりようじゃな」

「へエ——」

土佐守はもう盃を持っております。お菊は着換えをする暇もなく、ほんの心持化粧崩れを直して土佐守の前へ押出されたのです。

「——」

黙ってお辞儀をして、これだけが看板の大きな島田髷を傾げる

ように白い顔をそつとあげました。妙に人馴れた眼、少し綻びた

唇、クネクネと肩で梶を取って、ニツと微笑したお菊は、椎茸髷

と、古文真宝な顔を見馴れた土佐守の眼には、おどろくべき魅力

でした。

赤前垂は外はずしましたが、貧しい木綿物の単衣も、素足の可愛らしい踝くるぶしも、人を恐れぬ野性的な眼差まなざしも、お大名の土佐守には、まったく美の新領土です。



©2017 萩 柚月

奥方は今を時めく老中、酒井左衛門尉のじょうの息女で、一も二もなく

権門けんもんの威勢に押されている土佐守が、こんな野蛮やばんで下品で、その

くせ滅法可愛らしい娘を、見たことも想像したこともありません。

「もっと近う参れ、盃を取らせるぞ」

そんな事を言った時は、二本目の銚子ちょうしが用意されて居りました。

翌る日、柴田文内と吉住求馬は、支度金三百両を持って、お楽

の茶店に乗込んで来たのに何の不思議があるでしょう。上屋敷に

光っている奥方に憚はばかって、名義は本所閻魔堂前の下屋敷召使、十

日目には駕籠で迎えに来るということまで取決めに来たのです。

お楽と、お楽のちぞいの後添、——死んだお浅とお菊には継父けいふに当る弥

助——の喜びはいうまでもありません。お菊は大名の妾めかけと聞いて、最初は二の足を踏みましたが、上屋敷の奥方附と違って、下屋敷に召使格で居る分には、物見遊山も芝居見物も勝手と言ひ聞かされて、たちまち乗気になりました。

その上、土佐守はなかなかの美男で、表向お楽夫婦と親子の縁は切るが、内々は逢つても貢みついでも、いっこう構わぬという条件で、話はトントン拍子に運んでしまつたのです。

柴田、吉住両士は帰りました。が、後で考えると、そう簡単には玉の輿に乗れそうもありません。お菊には去年の秋から、落合の徳松という、悪い虫が付いて居たのです。

徳松は落合村の百姓の子で、素姓の悪くない男ですが、友達にやくざが多かったので、いつの間^{あい}にやら、その道に深入りし、親許は久離切られて、一かど兄哥^{あにい}で暮して居りました。お菊が背を見せたとなれば、ヒ首^{あいくち}くらいは振り廻す筈ですが、相手が大名と聞くと、威張り甲斐も暴れ甲斐ありません。仲に入る人があつて、手切れが三十両、女から男へやって、これは無事に話がつきました。

それから九日、化粧と支度^{しど}に大騒動をして、明日はいよいよ大名屋敷に乗込もうという前の晩――。

継父弥助の連れ娘^こ、歳はお菊より二つ上の二十歳^{はたち}ですが、跛足^{びっこ}

で不きりようで、余り店へも出さないようにしている、お吉と一緒に銭湯へ行つて、途中まで帰つて来たところを、——お吉が湯屋へ手拭を忘れて、それを取りに戻つた間に、無慙むざん、喉笛を掻き切られて死んでいたのです。

三

土地の御用聞、三みつ股またの源吉が、子分の安といつしよに飛んで来たのは、それから煙草三服ほどの後でした。

「何？ お菊が殺された？——退どけ退どけ、邪魔だ」

源吉の塩辛声を聞くと、お菊の死骸に蠅はえのように群がった弥次馬は、一ぺんにパツと飛散ります。

「徳松、——手前は、逃げぢやならねえ」
てめえ

うろろうろする徳松は、源吉にグイと袖を押えられました。

「親分、あつしは知りませんよ」

「何を、誰が手前が下手人だと言った」

「へエ——」

「変な野郎じゃないか、あッ血ッ」

徳松の顎あごから下は、手も胸も、着物も斑々はんはんたる血潮に染んでい

ることに、源吉は気がついたのです。

「お菊の死骸を抱き上げた時、こんなに附きましたよ」

「何？——お菊の死骸を抱き上げた時附いた血だ？　嘘を吐き

やがれ、殺す時ついた返り血を誤魔化せねえから、多勢の前でお

菊の死骸を抱き上げて、血染の上塗うわぬりをしたんだろう。そんな手を

喰うものか」

「親分」

「誰か、この野郎がお菊の死骸を抱き上げる前に、着物にも血のついていないのを見届けた証人でもあるかい」

源吉はそう言いながら四方を見廻します。『血の附いて居るのを見たか』と言わずに、『血の附いていなかったのを見届けた証

人はないか』と言ったところに、弥次馬心理を掴んだ源吉の働きがあつたのです。こういえば、白洲しらすの砂利じやりを掴んでまでも、徳松の無実を言い立てようという、勇氣のある篤志家とくしかは容易に出ないでしょう。

「親分、そいつは無理だ。あつしは何にも知らねえ」

「えッ、手前が知らなくたって、俺が知って居りゃ沢山だ。――」

お菊を追い廻したのは、手前の外にはねえ。落合の兄哥に遠慮して、土地の若い男は、門並御遠慮申上げて居るんだ。お菊に惚れただけの男なら、一束や二束はあるが、お菊を手に入れたのは手前だけよ。そのお菊が大名屋敷に奉公すると聞いて、指を啣くわえて

引込む手前じゃあるめえ」

「親分」

「うるせえ野郎だ。安、縛ってしまえ。顎を叩きたきや、お白洲で存分にやるがいい」

「大丈夫ですか、親分」

子分の安が躊躇ちゅうちよするのを、三つ股の源吉は叱り飛ばすように縄を掛けてしまいました。

「親分さん、娘を殺したのは、その男に間違いありません。どうぞ、敵を討って下さい、お願い申します」

お楽は娘の死骸を抱いたまま、繁く降る涙の顔を挙げました。

「お母さん、お菊さんを家へ運んで行きましようよ」

弥次馬と源吉の目に射竦いすくめられて居たお吉は、この時ようやく声を掛けました。

「おや？ まだそこに居たのかい、お前は」

「え」

「お菊がこんな姿になって、——お前は、まさか嬉しいんじゃないね」

「まア、おっ母さん」

お吉はあわてました。継母けいぼの舌の動きが、あまりにも辛辣しんらつだったのです。

「手伝っておくれ、——噛みついちゃ悪いから、お前は足の方を
持つがいい」

「——」

黙って死骸の足を持上げるお吉。わけもない涙が、この時ドツ
とこみ上げます。

「でも、やはり泣いてくれるんだね」

自分の言った皮肉のためとは、顛倒てんとうしたお楽には気がつか
なかつたのでしよう。

多勢の弥次馬は、この時ようやく気がついたように、母娘おやこ二人
に手を貸して、死骸をあまり遠くないお楽の茶店に担かつぎ込みまし

た。

後に残ったのは、三つ股の源吉と、子分の安の二人だけ。尤も安の手には、落合の徳松の縄尻が掴まれて居ります。

「おや、かみそり剃刀じゃないか」

血潮の中から、源吉は平べったいものを拾い上げました。

「よく使い込んだ剃刀ですね、親分」

子分の安は片手の提灯をかかげました。

「いいものが手に入った。安、引揚げようか」

「へエ——」

源吉はその剃刀を、徳松の物と決め込んでいる様子です。

四

翌る朝、植村土佐守家来、柴田文内と吉住求馬もとめ、女乗物を用意して、お楽の茶店の裏口へ、着けました。

「おかしいぞ。すだれ簾が下つて、きちゆう忌中の札が出て、中から線香の匂いだ。誰が死んだのだらう？」

柴田文内、鼻をヒクヒクさして居ります。

「左様——、主人かな」

吉住求馬にも合点が行きません。

折角玉の輿に乗りかけたお菊が、昨夜のうちに、非業の最期を遂げたことは、固もとより知る由もなかったものでしょう。

お楽弥助夫婦も、あまりの事に顛倒して、今日植村家の迎えが来るとは知っていながら、ツイ使いの者を走らせて、それを止めることまでは考え及ばなかったのです。

「あ、柴田の旦那様、娘は、娘はどうとう殺されてしまいました」
お楽は真っ先に飛んで出ました。

「使を差上げる筈でしたが、この通りの取込みで、何とも相済みません」

亭主の弥助は、額を叩いて追従ついでらしく深々とお辞儀をして居り

ます。

「それは気の毒、誰がいったいお菊を殺したのだ」

柴田文内、仰天しながらも好奇の眼を光らせませす。

「娘をつけ廻していた、徳松という野郎でございます。——昨夜のうちに縛られて行きましたか——」

「フーム、そう申上げたら、殿にはさぞ御落胆遊らくたんばすことであるうが、余儀ないことだ。——あんまり力を落すではないぞ、お楽」

「ハイ」

お楽は見事な女乗物を眺めながら、顔も挙げられないほど泣いて居りました。これに乗る筈だった娘が、昨夜の血潮も洗いきよ浄め

ず、逆さ屏風の裡びようぶに冷たく横たわっているのです。

「では、帰るとしようか、吉住氏」

「ここへ来合せたのも、何かの因縁だろう。せめて線香でも上げて行こうか、柴田氏」

吉住求馬は、若いに似気なく気が廻ります。

「なるほど尤も、年上の拙者が、それに気がつかないとは迂闊うかつ千万」

柴田文内はそんな事を言いながら中へ入りました。つづく吉住求馬。

二人並んで、心静かに拝んでいると、何やら急に家の中が騒ぎ

出します。

やがて騒ぎが鎮まると、バタバタと入って来たお楽、お菊の遺骸の前へへタへタと坐ると、何やら、訳のわからぬ事をブツブツ言いながら滅茶滅茶に線香を立てております。

「何だ、お楽」

「土地の御用聞——三つ股の源吉という親分ですよ」

「何しに来た」

「お吉を縛って行くんだそうで——」

「お吉？」

「亭主の連れ娘こで私にはま継しい仲ですよ。片輪者のくせに妬ねたみ根

性が強いから、お菊くらいは殺し兼ねません」

お楽はこういううちにも、お吉に対する憎悪の燃え上がってくるのを、どうすることも出来ない様子です。

「そんな事はあるまい。下手人は徳松とやらいう男で、昨夜ゆうべのうちに捕まったというではないか」

口数の少い吉住求馬はこう追及します。

「二人でやったかも知れませんか」

「何？」

「どうかしたら、お吉一人の仕業かも知れないじゃありませんか。

——お菊の姉のお浅がこの春死んだのも、お吉の拵こしらえた玉子焼に

中^あてられたからで——何だって私はあの時気が付かなかつたでしよう。玉の輿に乗る前の晩、あの化物娘と一緒に外へ出すなんて——」

お楽はキリキリと齒を鳴らします。継娘^{ままつこ}にお菊を殺されたと思
い込むと、矢も楯^{たて}もたまらぬ憎悪に、煮えくり返るような心持
だったのでしょう。

柴田文内と吉住求馬は、そこそこに外へ出ました。半狂乱の母
親を相手に、呪^{のろ}いと恨^{うら}みの数々を聞かされるのは、とても我慢が
出来ません。

外へ出ると、三つ股の源吉と子分の安は、弥助の連れ娘^こお吉を

縛り上げて、弥助の驚きと嘆きを他所よそに、ここを引揚げるところです。

「源吉とか申したな」

「へエ——、柴田様と吉住様で、飛んだことでもございましたな」
源吉の片頬には、ニヤリと皮肉な笑いが動きましたが、あわて、揉みほぐすように、その頬へ手を当てました。

「その娘に疑いが懸かかったのか」

と、吉住求馬、若い義憤らしいものが燃えたのでしよう、少しせき込んだ調子です。

「へエ——、昨夜いっしょに風呂へ行ったのはこの娘で、——手

拭を忘れて湯屋へ戻ったといいますが、番台で訊くと、戻らなかつたといひますよ」

「戻りましたよ、湯屋の前まで行つて、暖簾のれんを潜くぐろうとすると、私の手拭は入口のドブ板の上に落ちていたんです」

お吉は躍起やつきと抗弁しました。お菊より二つ年上ですが、跛足びっこのせいか小柄で、お浅お菊姉妹には比べられないにしても、お楽が化物娘というほど醜みにくくはありません。

自分のきりように自信のないお吉の、素顔のままの質素な様子が、人によつては却つてお菊の派手好みなのより良いという人があるでしょう。現に吉住求馬も、キリキリと縛り上げられて、訴

えようのない眼——泣き濡れた頬、いじらしくも歪む唇などを見ると、助けられるものなら助けてやりたいといった、やるせない心持になるのを、どうする事も出来なかつたのです。

「ドブ板に落ちていた手拭は、こんなに綺麗じゃないか」

源吉は生湿りの手拭をお吉の眼の前にヒラヒラさせました。
なまじめ

「家へ帰ってから洗ったんです」

こういうお吉の言葉は、勝誇る源吉を動かさそうもありません。
かちほこ

「徳松はどうした」

と柴田文内。

「まだ番所に留めてありますよ。——あの騒ぎのときは、筋向う

の碓床いかりどこに居たんだ、と言ひ張りますが、誰も覚えちゃ居りません。

——それに、お菊を殺した剃刀かみそりは、碓床の格子先からなくなつた品だそうで——」

「すると、殺されたのは一人で、殺したのは二人か」

吉住求馬の調子は皮肉ですが、

「徳松か、お吉か、どつちかですよ、旦那」

源吉は吉住求馬の抗議も一向通じないような顔をして居ります。

それから一刻^{とき}あまり、葬式^{とむらい}の手順もつかずに居る中から拔出して、亭主の弥助は番所にいる見廻り同心に訴え出ました。

「お菊を、殺したのは、この弥助に相違^{いじ}ございません。——いつもお菊やお浅に苛^{いじ}められて、小さくなっている、片輪のお吉が可哀^{あはれ}そうで、ツイあんな大それた事をしてしまいました」

というのです。

「馬鹿な事をいえッ。お前は、娘のお吉を助けたさに、罪を背負つて死ぬ気だろう」

と、いきり立つ源吉。

「親分、よく近所の衆から、聞いて下さい。お吉がどんな心掛のいい娘で、今まで二人の妹の無理を聞いていたか、よく解りましょう」

「――」

「そのお菊が、大名に見染められて下屋敷に上がることになってからというものは、人を人臭いとも思わぬのさばり様で、さすがの私も見るに見兼ねました。あの晩私も銭湯へ行った帰り、フト見ると路地の中にお菊がたった一人立って居るじゃございませんか。お吉に疑いがかかるとは夢知らず、碇床いかりどこの格子先から剃刀かみそりを取って、一と思いにあまお菊の阿魔を殺しました」

「それは本当か、弥助」

次第に通る訴うったえの筋を、三つ股の源吉も、見廻り同心も、無視するわけには行きません。その場で縄を打たれて、お菊殺しの下手人は、これで三人になったのです。

父親の弥助が自訴じそして出たと聞くと、お吉は今まで否定し続けた態度を一変して、

「お菊さんはこの私が殺しました。——父さんは何にも知りやしません。銭湯へ行ったのは本当ですが、私達より一と足先に家へ帰った筈です。私を助けるために、そんな事を言い出したのでしよう」

急にこんな事を言い張ります。

こうなるとどれが本当の下手人か判らず、そうかといって、三人の縄附なわつきを奉行所へ送るのは、三つ股の源吉始め、行きがかりで立会った見廻り同心の顔にもかかわるわけで、しばらくは目白の番所に留め置いたまま、一と晩念入りに調べ抜くことになったのでした。

その晩――。

事件はとうとう、神田の平次へ持込まれました。

「平次殿に逢いたい。拙者は植村土佐守家来、吉住求馬と申す者だが――」

変な事からこの渦中に卷込まれた吉住求馬は、思案に余った顔を、銭形平次のところへ持って行つたのでした。

「へエ、私は平次で、——どんな御用でございましたか」

慇懃いんぎんに迎え入れた平次に、吉住求馬は、事件の顛末てんまつを細々こまじまと物語りました。

「こんなわけだ。騒ぎが大きくなれば、自然主君の御名前にも拘かかわる。それに、奥方御里方、酒井左衛門尉様への聞えも如何、——早急に片附ける工夫はないものか」

「——」

「もう一つ。三人のうち二人、或は三人とも無実であろう。父親

が娘を庇かばい、娘が父親を庇かばう心根がいかにも不憫ふびん、助けられるものなら助けてやりたい、曲まげて力を貸してはくれまいか」

純情家らしい青年武士が、畳へ手を付かぬばかりにいうのを、銭形平次はじつと聴いておりました。

「縄張り違いは、私共の仲間であ、う、さ、い、事になつておりますが、御言葉の様子では、よほど深い仔細しさいがおありのよう存じます。八丁堀の旦那方の御言葉を頂いて、明日にもきつと雑司ぞうしガ谷やへまゐりましょう」

「乗出してくれるか、平次」

「へエ」

「礼を言うぞ」

吉住求馬は、主君大事と思い込んでいたのでしよう、平次が引受けると、思わずホッと胸を撫で下ろしました。

六

翌る日の朝、与力笹野新三郎の言葉を頂いて、平次は雑司ガ谷に乗込みました。

「銭形の兄哥、この通りだ。種も仕掛けもねえ、が、三人が三人とも、下手人の疑いがあるから、どれを奉行所へ送りようもねえ」

三つ股またの源吉は、イヤな顔をしながらも十手の義理で、八丁堀のお声掛りで来た平次に、一切のことを話しました。

「有難う、それで大概判ったようだ。なるほど三つ股の兄哥が三人縛ったのも無理はない。俺だって、そのうち一人だけ縄を解く気にはなるまいよ」

「そう言えば、その通りだが——」

源吉はいくらか心持が解けた様子で、苦い笑いを漏もらします。

「一と通り見せて貰おうか、何も後学のためだ」

「それじゃ、現場から——」

「八、手前てまえもいっしょに来るがいい」

平次とガラツ八の八五郎は、三つ股の源吉に案内されて、お菊の殺された湯屋の路地へ入りました。

一方は五尺ばかりの生垣いけがき、一方は黒板塀を前にした下水で、ドブ板の上は、血汐を洗って、一昨夜そのよの跡もありませんが、源吉に死骸の位置を、細々こまこまと説明させた上、平次はそこから湯屋の入口まで歩いて見ます。距離はほんの二三十間ですが、一箇所生垣が出張っているのです、見通しはつきません。

「お菊が声を立てさえすれば、湯屋の入口にいたお吉に聞えた筈だね」

と平次。

「だから、殺したのは、お菊をよく知っている者の仕業だ。しわざ流しの剽盗おいはぎや、あまり口をきいた事もないような人間のしたことじゃねえ」

「その通りだ。——が、別れ話がついて、他人になった筈の徳松が、未練らしくここで絡からみ附いたとしたら——手に刃物なんか持って居るのを、お菊はおとなしく応対するだろうか」

平次の観察は、もう源吉の思い及ばなかつたところまで飛躍ひやくします。

「すると、徳松は——」

ガラッ八は長い顔を出した。

「お前は黙って居ろ」

「へエ——」

湯屋の前、お吉が手拭を落したというあたりには、固より証拠などの残っている筈ありません。

「碇床いかりどこへ行ってみようか」

三人は元の道を取って返して、兇行のあつた場所から、十間とも離れていない、碇床の店先に立ちました。

「剃刀かみそりはここに置いてあつたのか」

平次は、油障子に大きな碇いかりを描いた入口の隣——砥石といしや鬢附びんつけ油あぶらや剃刀はさみや鋏はさみを並べた格子を指しました。

「これは、親分さん方、御苦労様で——」

碇床の親方は、少し頓狂な声を出します。

「格子の障子は開けて置くのかい、親方」

と平次。

「へエ、この暑さですから、閉め切っちゃ仕事が出来ません、

——お蔭で飛んだ迷惑をしましたよ」

「剃刀を持って行くのが見えないだろうか」

「見張って居なきや、ちよいと気がつきませんよ、親分」

親方の言うのは恐らく本当でしょう。

「あの晩、徳松がここにいたそうだが」

「将棋しょうぎの相手がありますから、三日のうち一日はここで暮します。あの騒ぎの時も、ここにいたように思いますが、お菊さんとお吉さんが銭湯へ行く姿を見ると、急にソワソワして何処かへ出かけたようで——」

親方の言うのが本当だとすると、徳松は少し不利益になります。「それを、俺も徳松に訊いたんだ。すると、あの野郎は、お吉といっしょだから、この辺で顔を見せて、声でも立てられるとうるさいと思い、お菊の家の前で待って居た——と、こう言うのだよ」源吉は引取って説明します。

「より撚を戻すつもりだったのかな」

と平次。

「いや、もういちど逢つて、名残が惜おしみたかつたというよ。どうせ心變りのしたお菊だし、明日玉の輿に乗ると決めて居るから、何を言つても無駄だと諦あきらめて居た——ともいうが」

「それが本音かも知れないな、こんどはお菊の家へ行つてみようか」

平次は、こう、静かに段落をつけました。

七

お菊が殺され、お吉が縛られ、弥助は自訴^{じそ}して出た、残るはお楽一人だけ。近所の衆や、親類の者が来て、今日の葬式の支度だけは急いでおりますが、悲劇の家は、何となく落莫^{らくぼく}として、身に沁みるような淋しさがあります。

「銭形の親分さん、——早く娘の敵を討つて下さい。いくらお吉が可愛いからって、お菊の葬式も済まないのに、うちの人まで自訴なんかして」

勝気らしいお楽も、すっかり気が挫^{くじ}けたものか、評判の銭形平次が乗出したと聞くと、その袖^{そで}に縫^{すが}り附いて、サメザメと泣くのです。

「心配することはないよ、下手人は今日明日中に判るだろうから」

「本当でしょうか、親分さん」

「判ったところで、何うもならないかも知れないが、ともかく、
落着いて居るがいい——そういったところで、娘二人に死なれ
ちや、落着いても居られまいが」

平次の眼には、深い哀憐あいにんが動きました。

「有難うございます、親分さん」

これが岡っ引手先の口から聞く言葉でしょうか。お楽はツイ耻はじ
も忘れて、声を立てて泣きます。

「大急ぎで来て間に合ったのが何よりだ。お菊の死顔を見せて貰

おうか」

「ハイ」

お楽はようやく涙をおさめて、三人を輿へ案内しました。幸い入棺にゆうかんしたばかり、白布を取って蓋ふたを払うと、早桶の中に、洗い浄きよめられたお菊の死骸が、深々とうずくまつて居ります。

静かに顔を起してやると、左顎ひだりあごの下へパクリと開いたのは、凄

まじい斬傷、蠟ろうのような顔に、昨日の艶色はありませんが、黒髪

もそのまま、経帷子きょうかたびらも不気味でなく、さすがに美女の死顔の美し

さは人を打ちます。

「フーム」

「銭形の兄哥、何うだい」

と源吉。

「刃物が違う」

「えッ」

「剃刀かみそりには峰みねがあるから、こう深くは切れない」

「いや、肉がはぜているぜ」

源吉は敢然かんぜんとしました。

「刃が厚いからだ」

平次も下りさがしません。

続いて、その晩着ていた、お吉と弥助の着物を出させましたが、

どつちにも血の飛沫しぶいた跡もなく、洗った跡もないのです。

「綺麗だな」

独言のように平次。

「血が附かないわけだ。剃刀かみそりを逆手さかてに握って、後ろから引つ搔くように切ったんだ」

源吉は手真似をして見せました。お菊の後ろから近づいて、何か声をかけながら、咄嗟とっさに剃刀を喉のどへ廻し、肩を押えてやった——と見たのでしよう。

「逆手に持って肩を押えながら切った剃刀なら、傷は上向に引かれる筈だ、——これは刃物の入ったところから下向に引かれてい

るぜ」

平次の推理はかしゃく仮借もありません。

「が——」

「前から切ったのだぜ。三つ股の兄哥、剃刀じゃない。脇差わきざしで前から切るとこうなる」

平次は手真似をして見せました。

「前から脇差で切られるのを、声も立てずに待って居たのかいと源吉。

「知ってる人だ、——お菊のよく知って居る人だった。眼の前へ来るまで自分が斬られるとは思わなかった——」

「それにしても脇差を抜くのを黙って見て居たというのかい」
源吉はなかなか承知しません。

「――」
平次は何か言いかけてましたが、聞いて居る者が多いのに気がつ
いたか、そのまま口を噤つぶんでしまします。

「親分さん、下手人はやはり、あの徳松の野郎でしょうか」
お楽は顔を挙げました。

「いや解らぬ、三人に逢って訊いてみなきゃ」
平次と八五郎と源吉は、目白の番所へ引揚げました。

そこへ行くと、三人の縄附に逢う前に、平次は、剃刀かみそりと手拭を見せつけて貫きます。

剃刀はありふれた床屋使いの品、柄えのところとうに籐とうを巻いて、磨とぎ減らしてありますが、なかなかよく切れそうです。

「これが、お吉の手拭か」

次に取上げた手拭は、何の変哲へんてつもない中古ちゆうぐの品で、よく乾いてしまつて、泥も砂もついてはおりません。

「湯屋の前で落したというが、砂も泥もついては居ない——尤もつとも、

お吉は帰って来てすぐ洗ったといってるが」

と源吉。

「成程な」

平次はそれっ切り手拭を返して、番所の中へ入りました。中には、徳松と、お吉と、弥助が、縄も解かず、役所にも送られず、三人の手先が付添って、黙りこくって控えております。

「徳松」

「――」

平次は凝^じつと若い男の顔に見入りました。精々二十五六でしよう。身を持崩してはおりますが、百姓の子らしい堅実さのどこか

に残る様子も、決して人を不愉快にさせるような男ではありません。

「皆んな言ってしまった方がいいぜ」

「――」

「お前が隠して居る事があるから、事面倒なんだ」

「――」

「お前はお菊を殺す気で、いかりどこ碓床から剃刀を持出したに相違ある

まい」

「いえ、親分」

徳松は振り仰ぎました。

「黙って聞け、——路地の外で待っていたが、二人の娘はなかなか来ない。そのうちに変な物音がしたので、飛込んで見ると、お菊はドブ板の上に殺されていた」

「親分」

「お前は剃刀を投出して、路地の外へ飛出し、お吉の声を聞くと、もういちど弥次馬といっしょに引返して、さつき身体についた血の誤魔化ごまかしように困ってお菊を抱き上げた筈だ」

「親分、——その通りです。恐れ入りました、どこで親分はそれを見ていました」

徳松はへたへたと崩折れました。

「何だつて早くそれを言わなかつたんだ」

「でも、剃刀を持出したり、着物に血がついたり、——逃れようがないと思ひました」

「錢形の」

不意に、源吉は平次の肘ひじを押えます。

「何だい、三つ股の兄哥」

「それじゃ、徳松の野郎に、言い逃れの口上を教え込むようなものじゃないか」

源吉はこみ上げる激動を押えている様子です。

「大丈夫だ、それに相違なかつたんだ。お菊を殺したのは徳松な

んかじゃない、据物斬すえものぎりの名人だよ」

「えッ」

「前から抜く手も見せず喉笛のどぶえを切って、噴ふき出す血を浴びる前に
逃出したんだ」

「——」

「後ろから徳松が来た筈ですぜ、親分」

ガラッ八が口を出します。

「その通りだ。前からはお吉が引っ返して来た、——が曲者いけがきは恐
ろしい腕利きの上身軽だ。お菊を仕留めると、左手の生垣いけがきを一気
に飛越えて、百姓地へ逃込み、騒ぎの初まったころは、目白坂を

下って居たよ」

「――」

「生垣の中に足跡があつた筈だ――今日はもう見えないが、その時すぐそれを見つけさえすれば、こんなに多勢縛るまでもなかつた」

平次の言葉には何の疑いもありません。

「お吉は？　親分」

とガラツ八。

「何にも知らなかつたのさ。お吉が下手人なら、濡手拭ぬれてぬぐいへわざと泥を付けたままにして置くよ。お吉は本当に風呂屋の入口で自分

の手拭を拾ったから、女らしい心持で、その晩騒ぎの最中にも手拭の泥を洗って置いたんだらう。手拭を洗ったのが、お吉に罪のない証拠さ」

何という明察、——源吉も一句もありません。

「弥助は？」

ガラツ八はまだ堪能たんのうしない様子です。

「娘を助けたい一心だ——さア、縄を解いてもらって帰るがいい。

お楽の手前、極りが悪かったら、俺がいつしよに行つて、よく話してやるよ。お楽だって、気の強いことをいつても、二人の娘に死なれちゃ、老先が心細かろう。——精々孝行をしてやるがいい、

なア、お吉」

平次は静かに言い終ります。

お吉は縄を解かれるのを待ち兼ねたように、父親の胸に飛附いて泣き出しました。

「それじゃ、下手人は誰なんだ」

源吉の不服そうな顔というものはありません。

「大方判っている積りだ。今晚、——いや、明日の晩、お菊の法事をして貰って、その席で話そう」

平次は静かに立上がりました。

体術と据物斬すえものぎりに秀ひいでたという、お菊殺しの下手人は誰？ どう

頸くびを捻ひねったところで、ガラツ八には解りそうもなかつたのです。

九

翌る日の晩、お楽の茶店に集まつたのは、近所の衆と、親類と、平次とガラツ八と、それに源吉を加えて、かなりの大一座になりました。

百万遍が済んで、皆んな帰ると、

「御免」

二人の武士が訪ねて来ました。言うまでもなく柴田文内と吉住

もとめ
求馬。主君植村土佐守が、お菊横死の趣おもむきを聞いて、二人に香華料こうげりようを持たせたのです。

一と通り挨拶焼香が済んで、弥助、お楽、お吉、源吉、ガラツ八と二人の武家を、店の次の間——仏壇の前に並べると、平次は静かに口を切りました。

「今晚は、お菊殺しの下手人の名を仏壇の前で申上げる事になっております。が、その前に、私の話がすんで下手人の名が出る迄、どんな事があっても、どんな飛んでもない事を申上げて、どうぞ静かにお聞き下さるようお願い申上げます」

「その代り、私の申上げる下手人の名が違っているとか、そのために、不都合な事が起るとかいう時は、その場でこの首を打ち落して下すつても、決して怨みうらには思いません」

思い入った平次の調子。仏壇を前に、半円を描いた七人も思わず固唾かたずを呑みました。

「話は少し差障りさしさわがありますが、詳しく申上げないと、お解りにならないかも知れません。どうぞ、しばらくお許しを願います」
これだけの枕をおいて、平次は本題に入ったのです。

上総国勝浦一万一千石の領主植村土佐守、遠乗りの帰りお楽かずさのくにの茶店に立寄り、お菊を見染みそめて、下屋敷へ入れることになり三百

両の支度金まで出しましたが、それほどの事が、いくら隠しても、奥方の耳へ入らない筈ありません。

奥方は時の老中酒井左衛門尉の息女、土佐守は一目も二目も置いておりますが、さすがに嫉妬しつとがましく、それはなりませんといえませぬ。

そこで、お家の体面論を真つ向に、お菊の茶屋へ案内して、この事件を惹起ひきおこした、柴田、吉住の両名へ、詰問したのでした。

「御両人と申しても、これは多分、吉住様お一人へ奥方から仰しやっただので御座いませう。吉住様は文武の達人で、酒井様から、奥方附として、御輿入おこしいれに従したがって植村家へ入られ、そのまま御

用人に取立てられた方でいらつしやいます」

「――」

平次の言葉に、両士は黙って聞入りました。ここまでは事件の凶星を言い当てた様子です。

「吉住様からは、土佐守へは諫言は申上げ憎い。が、奥方の思召しを無にして、土佐守様が卑しい女を召出されるのを、その儘にもならず、柴田様とお二人が、お菊を見出し橋渡しまでなすった形なので、悉く閉口されたことでしょう」

「――」

「この上は、下屋敷へ迎え入れる前に、お菊を殺す外はない。植

村家安泰のため、一つは又、土佐守様と奥方の仲を無事に納めるため、お二人のうちの一人——それも私は存じて居ります」

「——」

「——お菊を四五日付け狙ったことをごさいます。とうとう、明日は下屋敷入りという前の晩、風呂から帰るのを首尾しゅびよく斬つた、が、——前後から人が来て逃げようはない。咄嗟とっさの働き、生垣を飛越してお屋敷へ帰られ、翌る日はわざわざ乗物を仕立てて迎えに来られ、おどろいた振りをして帰られれば、それで万事無事に納まると思つて居られた——」

平次の話の予想外さ、一座は死の沈黙に陥ちて、息をするのも

忘れたよう。

平次はそれに構わず、冥府めいふの判官のように、冷たく、静かにつづけました。

「ところが、下手人の疑いはあらぬ三人に懸かつて、世上の噂は大きくなるばかり。土佐守様御名前も引合に出そうになつて見ると、そのままには差措さしおき難い。思案に余つて、吉住様は、私の家へ御出で下された、——一つは無実の罪で縛られた、三人の者を助けたいため、——一つは下手人が解らぬままに、うやむやに世評を揉み消したいため——」

一座の視線は期せずして、吉住求馬の顔に集まりました。植村家で名代の腕利き、純情で、忠義で、奥方のためには水火も辞さないのは、この人でなければなりません。

が、吉住求馬の顔は、作り附けた人形のように静まり返って、少しの表情の動きもなかったのです。

「それでは、お名前を申上げましょう、——主君のため、お菊を殺したのは」

平次は顔を挙げて、次の言葉が唇の上へ動きました。

「もうよい。許せよ、お楽」

平次の言葉を抑えて、脇差を引抜きざまガバと自分の腹へ突き

立てたのは、——なんと、中年者の武家、柴田文内の方だったのです。

「柴田様、よく遊ばしました」

と静かに膝行いざり寄る平次。

「柴田氏、——貴殿の仕業しわざとは、今の今まで拙者も知らなかった、こうと気がつけば——」

吉住求馬もとめもこの断末魔の同僚かたわらの側に悲痛な顔を差寄せました。

「平次、——ことごとく其方の言う通りだ。主君をここへお誘さそい

したのは、拙者一代の過あやまち、——これは吉住氏の落度ではない。

それにも拘かかわらず、吉住氏が奥方おしかりの御叱ごうむを蒙ったと聞いた時から、

拙者は自分の罪のつぐないを覚悟していたのだ」

柴田文内の息が切れて、一座は深い沈黙に落ちます。

「――」

「お楽、お吉、弥助――これで許してくれ。腹を切る外に、俺は、俺はこの過ちあやまを償つぐなう道みちを知らなかった」

「――」

「さらば」

「柴田様」

次第に落ち行く柴田文内の最期を、平次と求馬は、せめて左右から抑えてやります。

刀を抜くと、サツと畳に流るる血汐。

それを避けもせず、お楽とお吉は泣き伏しました。

「南無——」

忙しく香をくべて、鉦を叩くのは弥助。新仏の前に灯が揺らいで、夜の鳥が雑司ガ谷の空を啼いて過ぎます。

(編注)

作品中には、身体障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

玉の輿の呪

初出―「オール讀物」昭和十二年八月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第四卷
河出書房
昭和三十一年六月三十日初版

編集・発行 錢形俱樂部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>